

教職研究 第32号
立教大学教職課程 2019 年 3 月

中学校男子生徒に対するスクールカウンセラーによる学校教育相談実践事例 ー不登校と家庭内暴力への介入および教員との協働を中心にー

岩瀧 大樹

〔はじめに〕

近年の不登校の現状に関し、文部科学省（2018）は学校基本調査において、2016 年度の不登校児童生徒が、約 14 万人であることを公表している。しかし、2010 年の文部科学省の同様の調査では、不登校児童生徒は約 12 万人であり、2007 年度をピークにしてやや減少傾向にあることが示されていた。少子化の影響かつ、適応指導教室や教育センターなど、学校外での学びの機会が増えているにもかかわらず、不登校児童生徒数は増加している。これらの結果を踏まえると、今日の学校教育相談には、不登校に対し、改めてその支援の在り方や介入の方向性の検討が求められているといえよう。

さて、1995 年に委託事業として創始された「スクールカウンセラー（以下 SC）活用事業」に関しては、既に多くの実践が累積され、全国の公立学校への SC の配置拡充のみならず、私立学校での取り組みの充実（友清,2018 など）が進むと同時に、SC の教育現場への有効性が示されている。特に上記の不登校児童生徒へのサポートとしては、平岡（2018）や鈴木・岩瀧（2019）などのように、SC の導入から 20 年以上経過した現在においても、引き続き研究実践が蓄積されている。

その理由としてはいくつかの可能性があげられようが、代表的なものとして、不登校の問題が典型的なものではなく、まさに目の前で問題

を抱える児童生徒の現状に即した介入や支援が必要である点が指摘できる。ゴールを見据えた、オーダーメイド的なサポートが求められるとも言えるだろう。不登校の問題の背景には、起立性調節障害や気分障害などの精神疾患関わっているケースも少なくないが、いじめ、非行、発達障害、家庭環境など、対象となる児童生徒そのものに関わる要因や、家族や身近な交遊など、その周辺での人間関係が複雑に影響し合っていることは想像に難くない。

本事例では、「学校に行かない」という状況にありながらも、暴言や物品の損壊などの家庭内暴力の問題を抱える中学生およびその家族への支援について、教員と協働した SC の観点から振り返っていくこととする。なお、事例に関しては、個人の特定を避けるべく、適宜情報の加工修正を施したことを付記する。

〔事例の概要〕

1. 対象

A（中学校 2 年生男子）。色白で小柄。普通体型。折々に機敏な所作を見せるが、体を動かすことはあまり好まず、スポーツは不得手としている。

2. 家族と生育歴

父親（会社員）、母親（専業主婦）、A の 3 人家族。二世帯住宅で、1 階は父方の祖父（会

社役員)、祖母(専業主婦)の居宅となっている。X-3年4月までは、姉も同居していたが進学のため家を離れている。家庭内では幼少の頃から、周囲が大人や年の離れたきょうだいであったため、Aの希望が通ることが多かった。

3. 主訴および来談の経緯

X年6月、SCとして配置された筆者に、学級担任B(30代男性)より、「今年から担任している生徒のことで話がある」という相談が寄せられた。ここでBがとらえている問題として、①現在不登校であること、②家庭で暴れる場面が発生していること、の2点があげられた。

前者に関し、Aは、進級直後は登校していたが、4月中旬から欠席状態となり、上記の相談受理の段階まで継続していた。Bは適宜家庭訪問や、保護者(主に母親)との情報交換を実施しているが、現状に変化のないことを語った。また、後者に関しては、暴れるAに対し、保護者が手を付けられず、非常に困惑している旨が伝えられた。家庭訪問でのAの様子をBに尋ねると、嫌がる様子はなく、飄々とした感じだという。しかし、破損・修理状態の家具や壁が見られ、気になったとのことであった。

4. 面接方法

3.を踏まえ、教育相談担当教諭および養護教諭も交えた4人でこの問題に関するコンサルテーションを実施した。その結果、Aと母親に対し、SCも関わるのが適切と判断された。Bより母親にSCとの面接や家庭訪問を提案すると応諾が得られたため、面接開始となった。また、SCの面接や家庭訪問などの実施後

は、適宜BとSCをコアメンバーとするコンサルテーションの設定を確認した。

5. アセスメント

(1) Aの支援者より得られた情報

① Bからの情報

何度か家庭訪問を試みたが変化のないこと、どのような支援がいいかという葛藤を抱えていることが話された。また、数名の生徒にAの様子を尋ねたが、Aと仲が良いと判断していた生徒からは、「小学校の頃は遊んでいたけど、最近は絡まないから分からない」、とのことで、特にAと関わっている生徒はいない可能性が高いことが予想された。

② 母親からの情報

登校しなくなり、外出もしていない。家庭でのAは、終日ポータブルゲームやオンラインゲームに興じ、テレビを見て過ごしている。しかし、昼夜逆転はなく、8時くらいに起床しているとのことであった。「手が付けられない」という点に関しては、自分の意見や希望が通らないとき、特に欲しい物が入手できないときに多く見られる様子が語られた。小学生の頃も同様の場面はあったが、強く言い聞かせることで済んでいた。しかし、最近ではAが暴言を吐いたり、家具などに当たり散らしたりする場面が発生し、制止してもAの体も大きくなり、難しくなっているととらえていた。

(2) インテーク時点での見立て

不登校のきっかけや原因は不明であるが、他の生徒との接触がない様子から、同年代同士で

のコミュニケーションの機会が滞っている点
があげられた。そのため、まずは学校内での
A のサポーター（B や SC など）とのコミュニ
ケーションをベースとし、A の実態に即しつ
つ、コミュニケーションの幅を広げることが必
要だととらえた。また、家庭で終日ゲーム等に
興じてはいるが、起床や就寝の概日リズムを崩
さずにいる点は、A の自律的な生活適応であり、
登校に向けたリソースとして考えた。そのため、
各々の段階で「A の実行可能な行動」に目を
向けた支援を重視することとした。

なお、家庭内暴力に関しては、喫緊の問題の
可能性もあるが、自身も含め「対人への暴力が
ない」という点も A のリソースとしてとらえ、
母親との面接を中心に、問題発生の文脈につい
て段階的に理解を深めることとした。

6. SC による援助計画

(1) 母親に対して

SC の勤務日に 1/2W をベースとして約 50 分
の面接を設定した。主な問題として不登校と家
庭内暴力があげられていたため、適宜面接の開
始時にはアジェンダを設定することで、母親が
問題としてとらえている話題を優先的に話せる
よう心がけた。

(2) A に対して

家庭訪問による関係構築を第一段階ととら
え、場合によっては電話面接からのスタートも
視野に入れた。なお、家庭訪問の時間は A へ
の負担を考慮し、1/2W で 30 分を限度とする
こととした。また、登校に向けたプロセスには、
相談室等への別室登校も不可欠なプロセスと判

断し、管理職や養護教諭と協力し、フレキシブ
ルに A の対応ができるような体制を準備した。

〔経過〕

「 」は対象、＜ ＞は SC の発言を示す。
なお、A とは 25 回、母親とは 19 回の面接を
実施したが、本稿では各々の回数の区分は敢え
て明確にせず、事例のターニングポイントで振
り返ることとした。

第 1 期

出会いと問題の把握（X 年 6 月～X 年 7 月）

《母親との面接》

午前中、時間より早めに来室。丁寧な挨拶と
共にカウンセリングルームに入室。SC が来室
を労うと、「本当に困ってます」と話す。もの
をねだることが増え、それを断ったり、できな
い旨を伝えたりすると、大暴れするとのこと
であった。さらに、「今度近くに行ったらね、とか、
高価なものだからクリスマスまで待とうね、と
か言っても、聞かないです。暴れるんです」と
語る。そして、A は、「〇〇円じゃないか!」、「電
車で行けば近くだろ!」などと反論し、家具な
どに八つ当たりをするという。そのため、購入
を余儀なくされることが多いと話した。

また母親は、地域の子育てセミナーで A が
ものをねだった場面のことを相談すると、講師
より「絶対に買い与えないこと」というアドバ
イスを受けたという。そのため、父親と協議し、
A の要求に従わない努力をしていることを語っ
た。しかし、A が大声を出し暴れるため、近
隣の住民が様子を見に来ることがしばしばあっ
た。そのため、祖父母が「ご近所に恥ずかしい」

と、両親にAの要求を聞くよう指示するため、結果的にAの希望が通るとのことであった。「我慢しても結局同じなんです」と、落胆した表情を見せた。

《Aへの家庭訪問》

事前に母親からSCの家庭訪問について可否を尋ねると、「別にいいよ」という返答が得られたため、母親との面接を実施した同日午後に、自転車でA宅に向かった。リビングでAと話す。SCが挨拶と家庭訪問の受け入れに感謝を伝えると、「大丈夫です」と返答した。本棚にマンガ(X)があったので、その話題に触れると、AはXに関わる知識を話してきた。なお、面接のペースに関しては、1/2Wであること、午前中に母親との面接をしていることを伝えると、「平気です」と特に表情を変えずに答えた。

第2期

Aのできることと家族のできること(X年9月～X年12月)

《母親との面接》

改めて母親とSCで、暴言や家具などへの八つ当たりが発生する場面を整理し、子育てセミナーでアドバイスを受けた、問題の維持・増幅についてホワイトボードを活用し、Aの暴言などが発生するメカニズムを視覚的に共有した。母親は「説得してきましたが、意味がなかった」とこれまでの状況を語った。そこで、要求に対応しない意義を検討するなかで、「(自分が)トイレに籠ることはできる」と言い、「籠城作戦」という言葉が聞かれた。そのため、Aが何かをねだり始めた時には、淡々と対応し、トイ

レに籠ることとした。さらに、ものをねだる頻度を尋ねると、スイーツなどが多く、テレビのグルメレポートがきっかけとなっているようであった。テレビの視聴について重ねて質問すると、Aがテレビを見る、というよりA宅の習慣で終日テレビをつけており、Aが何気なく見ていると問題が発生している可能性が見出された。＜テレビがついていないと…?＞と問いかけると、特に見たい番組があるわけではないため、「実験してみます」と語った。

《Aへの家庭訪問》

家庭訪問が終了するとリビングを出て、玄関までSCを見送るようになっていたため、ある程度のラポールが構築されたととらえた。また、「AとSCが同じ部屋にいる」から「AとSCと一緒に部屋を出る」までの行動は形成されたため、次のターゲットは「AとSCと一緒に家を出る」と考えた。そこで、玄関でSCの自転車が古く、時々危険なこともある話題を振り、＜見る?＞と問うと、一緒に玄関を出て、駐輪していたA宅のガレージまでついてきた。自転車を見て、「ガタガタだ」、「危ないっすよ」など、口数の増える様子であった。＜乗る?＞と問うと、「死にたくねー」と笑顔を見せた。

次の家庭訪問で、Aは自転車の話題を振ってきた。AはSCの自転車に乗り、「こわー」と発し、笑いながら家の周囲を走行した。さらに次の回で、SCが到着すると、Aはガレージに出てきて、父親からもらったと、カラフルな塗装の自転車を見せた。自分の自転車はパンクしていたが、父親が自身の自転車をくれたとのことであった。この日は上がって話はせず、自

転車で一緒に近くの河川敷まで出かけた。Aは、「汗がいた」と話す。その後は、何回かSCが家庭訪問をし、Aと周辺のサイクリングをした。

第3期

それぞれの挑戦（X+1年1月～X年3月）

《母親との面接》

「トイレに籠城しました」と語る。その様子を尋ねると、テレビで有名デパートのスイーツを見たAがねだってきたため、クールに返事だけして、その後、トイレに籠ったとのことであった。「(Aは)怒りまくって、ドアを蹴ったり、叫んだりしていました。私も中で怖かったです。いざとなったら警察も仕方ないと思いました。ドアに穴は開きました。スマホ持っていたので、時間を見ました。5分くらいでしたね。そんなに長くはなかったです。(Aは)暴れた後、拗ねてゲームしていました。私が出て行っても無視でした」と語った。その際の母親の気持ちに触れると、買わないように説得することは、双方で主張し合うため時間がかかり、そこでAが暴言を吐いたり、八つ当たりをしたりする時間が長くなる、と感じたとのことであった。「(相手をして、トイレに籠っても)Aが物を壊すのは同じですね。でも籠った方が短い」と話し、「塩対応」と表現した。

また、テレビの視聴に関しては、Aが自らテレビを点けることはほとんどないことが分かった。Aはゲームに疲れたら、ソファなどに寝そべっており、「テレビは、点いているから見ている」という母親の見解であった。暴言や暴力との関係を探ねてみると、「よく分かりません。」と話した。

《Aへの家庭訪問》

家庭訪問をして、一緒にサイクリングを続けていた。学校近くに大型ショッピングセンター(Y)があるため、「<Yに行ってみる?>と提案すると、Aは、「学校の方じゃん」とあきれながら笑ったが、「いいよ」と応じた。Yの駐車場で開催中の古本市を見て、この日は終了とした。その次の回は、学校とは違う方向のショッピングセンターまでサイクリングをしたが、A宅に戻った際、「<自転車で(学校の)相談室に来るって難しい?>と尋ねると、「他の人がいなければ」と返答した。そこで、次回は暫定的に相談室登校とし、他の生徒が授業中である時間を設定し、無理であれば電話連絡をすることを確認した。

翌々週、時間通りにAは相談室に来室したが、母親と一緒にであった。Aは、自分の家は自転車通学エリアではないこと、未登録の自転車で登校すると叱られること、困っていたら母親が自動車で送ってくれたこと、をSCに説明した。母親は「帰るとき、必要だったら電話ください」と言って辞したが、Aは特に抗う様子も見せなかった。Aは相談室を見渡し、部屋の存在を知らなかったこと、他にも来室する生徒がいるか、などを尋ねた。30分ほどで、自分で帰れると告げ、他の生徒の動静を確認し、退室していった。

その次の回は体調不良で姿を見せなかった。翌週、Aに関するコンサルテーション中に本人からSCに電話連絡があった。「今日はどうしたらいい?」という質問であった。希望を探ねると、「お母さんが(自動車で)送ってくれる」

とのことであったため、相談室登校を受け入れた。2回の相談室登校が可能になった。

第4期

最終学年の意識 (X+1年4月～X年6月)

《コンサルテーション》

SCは4月中旬からの出勤となった。Bとのコンサルテーションで、春休みにBがAと電話面接を数回行ったこと、引き続きBがAの学級担任となったことが伝えられた。さらに、「(Aが) 来ているんです」と話があり、詳細を尋ねると、入学式の翌日、Bが午前中に家庭訪問をすると、Aは「3年生なので、(学校に) 行きます」との言葉を発したという。実際にAは保健室登校を断続中であった。

《母親との面接》

新年度最初の面接では、BがAの学級担任となったことを喜んでいた。また、この回は、初めて不登校に関する話題を最初に取り上げた。「連れ出してくれて良かった」と言い、昨年度終盤から少しずつの変化を認識していた。また、Aが「(学校に行くから) ワイシャツ出して」と言いだし、驚いたと話す。理由は尋ねたが、答えなかったという。

ものをねだることは、まだまだあるものの、母親がトイレに籠ると、「またその手かよ!」、「シカトかよ!」などの暴言は多いが、ドアを叩いたり、家具を壊したりすることは少なくなった気がする、という。母親は「塩対応」を意識し、ドアなどが壊れることは割り切り、トイレの中ではスマートフォンを操作し、時間を潰しているとのことであった。「無視している

のではないですよ、塩対応は」と話した。

《Aとの面接》

Aに家庭訪問から相談室での面接(対応)に切り替えたい旨を伝え、「はい」と返答した。登校を労うと、「高校生にはなりたい」という言葉が聞かれた。分からなくなっている科目もあるが、学習へのモチベーションは高いように見受けられた。ゆえに、この時期は相談室等では、1年生用の5教科のキーワードドリルを中心に取り組んだ。保健室や相談室が他の目的で使用される際には、相談室隣の空き教室で学習し、午前中を目途に帰宅するパターンが確立していった。時折欠席はあったが、連続はほとんどなかった。

第5期

学校全体での支援へ (X+1年7月～X年11月)

《コンサルテーション》

別室登校がほぼ確立し、給食もとれるようになったため、その次の展開について検討した。学級等への関わりに、Aは頑なに「いいです」という姿勢であった。しかし、個室で単独の学習だけでは、状況は変わらない、という見解も話題となった。そこで、Aのコミュニケーションに関するリソースを改めて吟味した。その中で、Aは教員室隣の部屋で、副担任の教員たちと給食をとっていること、若手の副担任(C)のジョークなどにも笑っていること、などが見出された。これらの情報から、BやCが、適宜Aの学習指導を実施することが提案された。Bは学年教員間で校時表を調整し、当面の間、1時間目を空き時間にする協力を得て、20分程

度、担当科目（英語）の個別指導を行うこととした。Cからは、Bの依頼に協力し、Aの学年は担当していなかったが、適宜空き時間の個別指導（数学）に快諾を得られた。

《母親との面接》

家庭内暴力が減ったように思う、と話す。その点を尋ねると、「家にいないからですか」と答え、Aの別室登校とリンクしているように思う、と語った。しかし、1階の祖父母宅では、Aの要求に対し、ある程度応じている気配があるとのことであった。この点に関しては、大人4人で約束もしているが、祖父母は困りながらも、末の孫がかわいいらしく、甘やかしてしまうのでは、という見解を伝えた。SCが、Aが登校を継続中であること、暴言や八つ当たりが減少していることなどを整理すると、「そこは変わっているんですね。あとはうちの大人が考えないと」と語った。そのため、定期的な面接は一度終結とし、今後はオンデマンドでのスタイルにシフトすることとした。

《Aとの面接》

この時期も学習サポートを中心とした。BやCの個別指導を優先させ、SCの空いている時間は、前述のドリルに加え、地名や特産物のクイズゲーム、語彙や難読のパズルゲームなども使用した。Aは、ある程度学習し、その後は相談室の歴史マンガ等を読んで過ごしていた。時折、「（ドリルを）もっと難しい方が良くないですか」や、「一問一答以外のもやらないとまずいですよね」という提案をしたため、BやCから過去の定期試験問題の提供を依頼し、A

との学習に活用した。ここでも折を見て、集団への間接参加をSCからほめかしたが、この話題になると、表情が強張っていた。自律的に学びを進められる反面、次のステップに向かうレディネスが十分ではないと判断し、別室登校の時間を延ばすことを当面の目標とした。

第6期

新たな目標へ（X+1年12月～X+2年3月）

《コンサルテーション》

個別指導がうまく展開している様子がBより語られた。2学期後半からは、校時表を従来に戻していたが、学年教員も空き時間にAの個別指導を担当している旨が報告された。また、進学に関しては、AとBで協議を重ね、通信制の高等学校を選択した。ややA宅からは離れるが、本人が「そっちがいい」と決めたとのことであった。そのため、SCとの学習の際にも、作文や面接の練習がリクエストされたため、快諾した。

《母親との面接》

2月末に約3か月ぶりにアポイントがあった。「塩対応」を父親も真似しているとのことであった。ただ、祖父母からは「冷たい」と非難されることもあるが、これは祖父母と夫婦で、折り合いをつけていきたいと語った。また、Aが携帯電話の所持に強い興味を示してきたが、この点には祖父母も「高校生になったら」という条件を出した様子が話されるとともに、「（Aは）それを聞いて、頑張っているんだと思います。（携帯電話は）スイーツと違う次元なんですね」と話していた。

《A との面接》

この時期は登校時間も長くなった。また、前述の相談室隣の部屋を「学習室」と暫定的に呼び、そちらに自律的に登校していた。しかし、他の生徒と接触はできるかぎり回避している様子がうかがえた。作文を中心に A のサポートを実施したが、「書く方が俺には向いている」と言い、課題作文の作成には精力的であった。SC は過去の高等学校入試での出題をアレンジして A に示したが、A は「それは昭和時代の中学生だ」、「〇字も書けない」と言いつつも、取り組むことで自信を深めていた。

ここまでの経過と A の卒業までの時間を踏まえ、SC としては現状維持を重視することとし、卒業まで支援を続けた。

《フォローアップ》

時折欠席は見られるものの、別室登校はかなり確立した。1 月下旬に無事に志望校に合格する。2 月の SC の出勤日には母親も来室し、B と SC などへの感謝の意が伝えられた。A は母親の前では淡々としていたが、B や SC と一緒の際には、笑顔を見せた。卒業式には顔を出さなかったが、当日の午後に登校し、証書を受け取った。卒業後は、ほぼ目安の単位を取得し、新たなステージで着々と努力をしているとのことであった。

〔考察〕

1. 登校への支援

まず、ゲーム等に流されず概日リズムをある程度守るなど、適応を維持している面を尊重し

た。A はコミュニケーションが深まると冗談を言ったり、ユーモアのある表現をしたりすることもあるが、普段はあまり表情を出さず、飄々としていた。A に起床できている点を伝えても、反応はなく、そのこと自体を当然ととらえていると判断した。ゆえに、学校に行かないことを、いつかクリアしたい問題と認識していた可能性があげられる。実際、別室登校が可能になった時点でも、A は学ぶことを自然と選択した。

次に、「登校する」という行動に関しては、認知行動療法などでは、「問題解決技法」として、これを細分化し、段階的にクリアすることを目指す。勿論、問題解決に向けてモチベーションを整えることは重要であるが、概日リズムを崩さずにいたことは、このモチベーションにリンクしていると SC はとらえた。そのため、A の登校を支援する、という文脈から、初期のプロセスを、「A と SC が A 宅のリビングで過ごす」→「A と SC が A 宅のリビングを出る」→「A と SC が A 宅の玄関に行く」→「A と SC が A 宅の玄関を出る」といういくつかの段階とした。また、このケースでは、A が家を出るツールとして自転車が鍵となった。ある程度アクティブなクライアントには、岩瀧・山崎 (2014) のようにゲームなどをきっかけとして、最初のアクションにつなげることも可能であろう。しかし、A があまり体を動かすことを好まないため、できることを模索していたが、SC の古い自転車がきっかけとなったのは、予想外の結果であった。自転車走行が可能になると、学校までの A のアクションにはドライブがかかっていたように感じている。母親も、「外出をしなくなった」と語っていたが、自転車をきっかけ

としたひとつのアクションが、次のアクションを引き起こす、ポジティブな連鎖の発生につながったととらえている。BやSCの提案に、抵抗なく応じていた様子から、Aはコミュニケーションやアクションへのタイミングを逸していた面もうかがえる。

一方で、Aのパーソナリティからも学校や学習に対する気持ちが途切れていなかったことが読み取れる。SCは自転車登校の背景を理解せずAに提案してしまったが、Aはその点を冷静に判断し、学校の規則を遵守する姿勢を見せた。ここでもAは学校に背中を向けていたのではないと推察される。しかし、なぜ不登校になったのか、また別室登校が可能になっても、集団でいることを拒んだのか、その文脈は不明確であった。その原因は存在するのか、あるいは存在しても解決可能かは、A自身にしか分からないであろう。また、A自身にも分からない部分があるだろう。本事例ではその原因究明に固執せず、登校に向け、この時点のAのことができること、という具体的な行動に焦点を当てたことが、別室登校につながったと推測する。

なお、不登校の支援では、教室復帰や集団への所属が一定のゴールとされることが多い。Aにも別室登校がある程度可能になった後、集団へのアプローチを適宜提案したが、「それは無理」と答えることが多かった。コンサルテーションにおいて、別室で自律的に学習を進めていること、ほぼ始業時に登校できたこと、次第に学校にいる時間が長くなっていることなどから、この状態がAにとって無理のないペースであり、次のステップには時間やAの気持ちの整理が必要だと理解した。そのため、次のステッ

プの提案よりも、現状維持を重視した。

2. 家庭への支援

家庭内暴力は不登校の出現とほぼ同時期であり、A自身の表現困難な思いが関係していた可能性があげられる。もともと、家庭内では年長者に囲まれており、ある程度の要求の通っていた面もあろう。しかし、家具などを壊すことはあっても、人に手を挙げていない点から、Aなりの価値判断をうかがい知ることができる。欲しいものに対する言動は、やや退行的な側面であったといえよう。

今回のケースでは、主に母親と、対応や環境の調整も試みた。Aが暴れたら、相手をしない（籠城作戦）、説得ではなく他の対応（塩対応）を試みたが、テレビ視聴の調整もある程度意味があったと考える。特にAがスイーツなどを要求するのは、午後のたまたま見たテレビの内容である可能性があげられたが、視聴時間の調整で、母親から何らかの変化をとらえた言葉が得られた。

3. 学校全体での支援

SCの家庭訪問、Aの別室登校など、Bを中心とする全教職員からAへの理解と支援が得られた。また、別室登校をしているAに対し、学習用プリントだけではなく、対応可能な教員が学年を越え、Aを受容していたのが今回の結果につながった。登校したAの「できること」、「すべきこと」である「学習の機会」を設定したことは大きな意義があったと判断できる。これが、Aの登校へのモチベーションの維持につながったと推測する。加えて、教員全体が、A

を無理に教室に促したり、集団への参加を強いたりせず、Aのペースを尊重していた点も、Aの別室登校を支える要因になったと考える。

4. 今後の課題

コミュニケーションへの介入を検討したが、本事例ではAと同年代の生徒とのコミュニケーション構築までには至らなかった。しかし、複数の教職員など、学校のサポーターとのコミュニケーションは段階的に構築することができた。今後の展開としては、別室登校をしているAのところへ他の生徒が来る、そしてその数を次第に増やしていく、などのアプローチもあげられようが、目の前のAの実態および介入ができる卒業までの期間などから、現状がAにとって適切なゴールであり、この状態を維持が最適と判断した。

一方、家庭内暴力に関し、唐澤ら(2008)は、不登校や引きこもりなどの思春期青年期問題とともに論じられる傾向を示すが、本事例では、明確な因果関係を見出すことはできなかった。しかし、母親の言葉にあったように、登校せず家にいることでものをねだり、暴言を吐く状況等が発生していたが、Aがものをねだるきっかけをなくすことや、対応を変化させたこと、そして、BやSCでAを家から出すとともに、学校に引っ張る支援をしたことなどが、Aのモチベーションや適応的側面とマッチし、別室登校(家にいない状態)につながったととらえている。ある程度、この問題は沈静化したようであるが、家族内で見直すべき新たな問題の存在もうかがえたため、家族全体を含めた支援も検討の余地があると考えている。

〔引用文献〕

- 平岡祐太郎 2018 「不登校生徒に対する別室を活用した多面的支援システムのあり方」 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集,85,29-40.
- 岩瀧大樹・山崎洋史 2014 「不登校児童に対するスクールカウンセラーによる教育相談的介入の検討—家庭訪問から教室復帰に向けたサポートの実践事例研究—」 教職研究,24,45-55.
- 唐澤由理・近藤俊彦・織田順 2008 「家庭内暴力を伴う不登校男子中学生への多面的支援—適応指導教室と母子並行面接とにより心理的成長を支えた事例—」 カウンセリング研究,41-3,266-276.
- 文部科学省 2018 平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(確定値)について
- 鈴木里佳・岩瀧大樹 2019 「不登校傾向の男子中学生への教育相談的介入について—スクールカウンセラーによる母親への支援を中心に—」 群馬大学教育実践研究,36,297-306. (印刷中)
- 友清由希子 2018 「私立学校のスクールカウンセリングにおける不登校支援—学校組織に対する新しい取組の提案を通して—」 福岡県立大学心理教育相談室紀要,10,19-24.